

「開戦か和平か 東条英機内閣発足へ」 関係年表

37	1904	2. 10 露に宣戦布告。日露戦争始まる	16	1941	9. 5 近衛、国策要領を内奏 ◆天皇、杉山元参謀総長と永野軍令部総長を招致し「外交第一」を確認◆近衛、東久瀨宮に東条陸相の説得を依頼
38	1905	9. 5 ポーツマスで日露講和条約調印			9. 6 御前会議、国策要領決定。天皇異例の発言で「和平」の意思を明らかに ◆近衛、グルー大使に首脳会談開催要請
3	1914	7. 28 第一次世界大戦始まる			9. 7 東条、東久瀨宮の協力要請を拒否
7	1918	11. 11 ドイツ降伏。第一次大戦終わる			9. 20 陸軍、対米要求に「支那一定地域の軍隊、艦船の所要期間駐屯」を明記
6	1931	9. 18 柳条湖で満鉄爆破。満州事変始まる			9. 25 統帥部「10月15日に和戦の決」と要請
7	1932	3. 1 満州国建国宣言			9. 29 山本五十六連合艦隊司令長官、永野に「戦争を避けるよう」上申
		5. 15 五・一五事件。犬養毅首相射殺される			10. 2 ハル國務長官「日本軍の中国、仏印から全面撤兵要求」の回答
8	1933	3. 27 日本、国際連盟を脱退			10. 4 ソルゲ「今月から来月に日米開戦」とモスクワに打電
11	1936	2. 26 二・二六事件			10. 5 陸軍首脳会議「外交の目途なし。開戦決意」、海軍は「条件緩和、交渉継続」
		11. 26 日独防共協定調印			10. 6 福留繁海軍作戦部長、陸海軍局部長会議で「対米戦自信なし」と発言
12	1937	6. 4 第一次近衛文麿内閣発足			10. 11 富田健治内閣書記官長、及川古志郎海相を訪ね海軍の協力を要請
		7. 7 盧溝橋事件勃発。支那事変始まる			10. 12 五相会談。及川は「総理裁決に一任」
14	1939	5. 11 満蒙国境でノモンハン事件起こる			10. 14 閣議で東条は「中国撤兵で譲歩は不可能」◆東条、近衛に総辞職勧告。後継に東久瀨宮陸軍大将を提案
		7. 26 米、日米通商条約の廃棄を通告			10. 15 近衛、東久瀨内閣案について内意を伺う。内大臣木戸幸一は反対
		8. 23 独ソ不可侵条約調印			10. 16 第三次近衛内閣総辞職
		9. 1 第二次世界大戦始まる			10. 17 重臣会議。木戸の強い推薦で東条に大命。「白紙還元」の御詔
15	1940	6. 22 フランス降伏			10. 18 東条内閣発足。外相東郷茂徳、蔵相賀屋興宣、海相嶋田繁太郎 ◆東条、初閣議で国策再検討を指示 ◆ソルゲ逮捕
		7. 22 第二次近衛内閣発足。外相松岡洋右、陸相に東条英機			10. 23 国策再検討の連絡会議始まる
		9. 23 日本軍、北部仏印に武力進駐			11. 1 連絡会議「12月1日まで交渉、成功しなければ武力発動」を決定
		9. 25 米、日本の外交暗号解説			11. 26 ハル、野村に「ハル・ノート」手交
		9. 27 日独伊三国同盟、ベルリンで調印			11. 27 連絡会議、米国の最後通牒と結論
16	1941	4. 13 日ソ中立条約、モスクワで調印			12. 1 御前会議、対米英蘭開戦を決定
		4. 18 野村吉三郎駐米大使から「日米諒解案」の電報。日米交渉始まる			12. 8 真珠湾攻撃。太平洋戦争始まる
		6. 22 独軍、ソ連に侵攻。独ソ戦始まる			17 1942
		6. 28 政府大本営連絡会議「帝国国策要綱」採択(対ソ戦準備、南部仏印進駐)			20 1945
		7. 7 「関東軍特別演習」の第一次動員発令			5. 7 独、連合軍に無条件降伏
		7. 16 近衛、松岡更迭のため内閣総辞職			8. 8 ソ連、対日宣戦布告。満州から侵攻
		7. 18 第三次近衛内閣。外相に豊田貞次郎			8. 15 敗戦
		7. 21 仏、日本軍の南部仏印進駐を受諾			12. 16 近衛、戦犯に指名され自殺
		7. 25 米、在米日本資産を凍結			
		7. 28 日本軍、南部仏印に進駐開始			
		7. 31 永野修身軍令部総長「対米戦決意の必要」を上奏			
		8. 1 米、対日石油輸出を全面禁止◆企画院「最後の決心をすべき竿頭に立てり」			
		8. 8 野村大使、日米首脳会談を申し入れ			
		8. 9 参謀本部、年内の対ソ武力行使断念			
		8. 16 海軍、陸海軍局部長会議で「対米戦の決意」を含む「国策遂行方針」提案			
		8. 30 陸海軍で「帝国国策遂行要領案」合意			
		9. 1 海軍、艦隊の戦時編成に移行			
		9. 3 連絡会議、国策遂行要領採択(10月上旬に要求貫徹の目途なき場合、対米戦決意)◆米、首脳会談を事実上拒否			

- 昭和16年10月18日に発足した東条英機内閣
▽「開戦内閣」になり 一般的には
「軍部独裁のもと太平洋戦争に突き進んだ内閣」
▽昭和天皇と内大臣木戸幸一が東条に託したのは
「戦争を避けるための 最後の努力」

- 日米開戦は、実質的には9月6日に決まっていた
▽御前会議で決定した「帝国国策遂行要領」
日米交渉に 10月上旬のタイムリミット
要求貫徹の目途ない場合 直ちに開戦決意

「帝国国策遂行要領」

- 一 帝国ハ自存自衛ヲ全ウスル為対米(英、蘭) 戦争ヲ辞セザル決意ノ下ニ概ネ十月下旬ヲ目途トシ戦争準備ヲ完整ス
- 二 帝国ハ右ニ並行シテ米、英ニ対シ外交ノ手段ヲ尽シテ帝国ノ要求貫徹ニ努ム
- 三 前号外交交渉ニ依リ十月上旬頃ニ至ルモ尚我要求ヲ貫徹シ得ル目途ナキ場合ニ於テハ直チニ対米(英、蘭)開戦ヲ決意ス

▽天皇は 明治天皇の御製を読まれ「和平」の意思

「よもの海 みなはらからと思ふ世に
なと波風の立ちさはくらん」

▽しかし「開戦決意」の国策要領は取り消されず決定
▽近衛文麿内閣は 身動きがとれなくなり総辞職

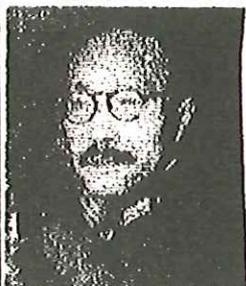
- 御前会議決定に追い詰めた8月1日の石油禁輸
▽引き金は 南部仏印進駐(7月28日)
▽企画院総裁鈴木貞一は 政府大本営連絡会議に
「開戦を決意すべき時期に来た」

「物資動員上よりの要望」(8月1日醜)

「英米等に依存し資源を獲得して国力を培養せんとするも今や極めて困難とする所にして、現状を以て推移せんか帝国は遠からず瘦身起つ能わざるべし。即ち帝国は方に遅疑することなく最後の決心を為すべき竿頭に立てり」

東条 英機(とうじょう・ひでき)

明治17(1884)～昭和23(1948)東京生まれ。



陸軍大将。関東軍憲兵司令官、同参謀長、陸軍次官を経て昭和15年近衛内閣陸相。中国撤兵に反対、近衛内閣総辞職を受けて

16年10月首相。陸相、内相を兼務。太平洋戦争突入後は翼賛選挙、憲兵政治で軍部独裁体制を敷く。19年2月参謀総長を兼務したが戦局を挽回出来ず7月総辞職。戦後ピストル自殺を図ったが果たせず、A級戦犯で刑死

木戸 幸一(きと・こういち)

明治22(1889)～昭和52(1977)東京生まれ。



侯爵。文相、厚相、内相を経て昭和15年内大臣。天皇側近の重臣として力を振るい、東条を首相に奏請した。A級戦犯で終身禁固刑を受け、病気で仮釈放。著に東京

裁判資料となった「木戸幸一日記」

近衛 文麿(このゑ・ふみまろ)

明治24(1891)～昭和20(1945)東京生まれ。



公爵。貴族院議長を経て昭和12年6月首相。直後に勃発した支那事変の早期和平に失敗。

枢密院議長を経て15年7月第二次内閣組織。大政翼賛会を設立し日独伊三国同盟を締結。対米関係悪化で16年7月松岡洋右外相を更迭、第三次内閣を組織。南部仏印進駐で石油禁輸を受け日米交渉妥結の展望を失い、10月総辞職。戦後戦犯容疑で指名され服毒自殺した

- ▽陸軍も「関特演」(関東軍33万を83万に増員)を180度方向転換させ 南へ
- ▽参謀本部は8月9日 年内の北方武力行使中止「陸軍作戦要綱」の末尾には「南方ニ対シテハ十一月末ヲ目標トシテ対英米作戦準備ヲ促進ス」

●日米戦になれば主役の海軍が「やる気」を表明

▽8月16日の陸海軍局部長会議に 海軍案提案

「帝国国策遂行方針案」(要旨)
 「十月下旬を目標に戦争準備と(対米)外交とを併進させ、十月中旬に至るも外交妥協せざる場合は(対米)実力を発動する」

▽軍令部総長永野修身が 対米開戦論の急先鋒
 在米日本資産凍結(7月26日)に
 「こうなったらもう戦争だ」

▽7月31日 「開戦決意の必要」を上奏
 天皇の質問に「日本海海戦の如き大勝は勿論勝ち得るや否やもおぼつきません」

▽天皇は木戸に「永野は好戦的で困る 誠に危険だ」

▽木戸は 及川古志郎海相を呼び出した
 及川は永野を更迭すべきだったが かばった海軍次官沢本頼雄は日記に
 「進退問題に及ぶも已むなき状況なるも海相にはそれだけの決心なし」

..... 永野の自慢話
 永野は昭和18年6月、陸軍の寺内寿一、杉山元と一緒に元帥になったが、「大将になったのは自分が先だから、元帥府の席次も官報掲載の順序も自分を先にすべきだ」と内閣、陸軍に注文をつけ承知させた。そして「年齢から云えば自分が一番下だが、それが上下逆になった」

●海軍に「案山子の艦隊になる」石油の不安

▽海軍は9月1日 艦隊を戦時編成に移行
 作戦課長・富岡定俊大佐(のち少将)の話

「毎月50万トから80万トくらいの石油の手持ちがなくなっていく。ルーズベルトは日本の石油がなくなって、どうしても戦争に勝て

鈴木 貞一(すぎき・ていいち)

明治21(1888)～平成1(1989) 千葉県生まれ。陸軍中将。陸軍革新派の「木曜会」を組織。興亜院総務長官心得、昭和16年4月企画院総裁。戦時の物資動員計画を推進。A級戦犯で終身禁固刑。31年釈放

参謀本部「機密戦争日誌」

(8月8日) (1)勝算如何 対英米戦ヲ決意スベキヤ、対米長期戦ハ避クベシ、ソノ勝目ハ無キモ不敗ノ算ハナキヤ
 (2)枢軸対策 対英米屈伏スベキヤ、枢軸離脱反対、対米屈伏今更出来ルヤ、実質的離脱ハトモカク表面的離脱ハ皇国ノ面子之ヲ許スヤ
 (3)独ヘノ便乗 戦争モセズ而モ屈伏モセズ打開ノ道ナキヤ、皇国ノ面子ヲ損ゼズシテ一時的ニ妥協シ日米開戦ノ発生ヲナルベク遅カラシムル方策案ナキヤ、少ナクトモ独ノ対英攻撃更ニ激化セラルル時期迄米ヲ抑エ油ヲトル方策ナキヤ
 (4)米国ノ意図如何 問題ハ対米外交ノ条件也、一部ノ屈伏後退ノミニテ対米外交ノ成功ハ疑多シ、全面的屈伏ナラ油ヲヨコスベシ、南方進出セザル条件ニテ米ハ油ヲヨコスヤ否ヤ
 (12日) 外交ニ依リ一時的ニ油ヲ取得シ其場ヲ凌ギウルトスルモ、米海・航空軍ノ充実ノ暁ハ如何、ソノ場合「ストップ」ヲ受クルモ起ツ能ワザルニ至ル事ナキヤ」

永野 修身(ながの・おさみ)

明治13(1880)～昭和22(1947) 高知県生



まれ。海軍大将、元帥。海相、連合艦隊司令長官を経て昭和16年4月軍令部総長。開戦時には海軍強硬派の意見を代表。A級戦犯で起訴され裁判中病死

なくなるところまで交渉を引き延ばしているのではないか。これは恐ろしいことだと思った。石油のない戦争は、どんなに考えても勝算がない。作戦部が早く戦争の決定をしてほしいと迫った根本原因は、ここにあった」

▽戦争指導の基本を 検討すべきだった

- ・この戦争自体をどう処理するのか
- ・どういう条件のもとで戦うのか
- ・どこまで行けば勝つのか

▽富岡はじめ軍令部首脳は 第一次大戦の塹壕戦「戦線膠着の中で講和の機会」と 漠然と期待

▽最後は「ドイツ依存」

参謀本部の独ソ戦判断も「ドイツは年内にソ連の大部分を席捲するだろう」

▽「総力戦」を唱えながら「全面戦争」の観念がない

▽日露戦争のように「最初から限定戦争で

米の講和斡旋期待」というわけにはいかない

▽他力本願と戦術的思想が先走った「軍人の戦争観」

▽陸軍では 田中新一作戦部長が「即時開戦決意」

「海軍が成算ありと云うのだから大丈夫だろう」

●「対米戦決意」の陸海軍合意がなるまで、国力判断、成算についてトコトン検討することはなかった

▽米国から帰国した岩畔豪雄(いわら・たけお)陸軍大佐は「負ける とわかっている戦争をやるバカがいるかある程度譲歩しても 戦争をしてはいけない」

▽返ってきた答えは「今や勝負は問題に非ず戦争は不可避の宿命になっている」

▽岩畔には 南方転出命令(開戦後インド独立協力機関長)

●陸海軍は9月3日、連絡会議に「帝国国策遂行要領」

▽それまでの日本側の言い分は そのままでアメリカが呑まなければ 戦争に訴える

▽官僚の書いた作文の鵜呑みに 慣れっこ

▽もっぱら 字句の修正に終始

及川の要求で2か所改めたが 五十歩百歩

▽「戦争決意」という重大な決定が

わずか1日 7時間の会議で決まり

6日の御前会議に かけられることに

及川 古志郎(おいか・こしろう)

明治16(1883)～昭和33(1958)岩手県出身。



海軍大将。東宮武官、海兵校長、横須賀鎮守府長官。昭和15年9月海相になると、それまで海軍が反対していた三国同盟に同意し、開戦

か否かも「総理一任」。19年軍令部総長

富岡の話

「敵に大損害を与えて勢力の均衡をかちとり、そこで妥協点を見だし、日本が再び起ち得る余力を残したところで講和する。これが私たちの初めからの考えだったが、講和の希望に対する裏付けが特にあったわけではない。ただドイツも勝っていることだし、バランスということもあるので、講和のきっかけはその間に出てくるだろう」

岩畔大佐の日米物的戦力表

鉄 鋼	1- 20	石 油	1-500
電 力	1- 6	アルミ	1- 6
石 炭	1- 10	工業動力	1- 5
飛行機生産力	1- 5	自動車生産力	1-450

国策要領はこう改められた

及川海相の要求で、原案では開戦決意の時期が「九月下旬二至ルモ」となっていたのを「十月上旬頃」に遅らせた。また「我要求ヲ貫徹シ得ザル場合」となっていたのを「貫徹シ得ル目途ナキ場合」と、「目途」の字句を入れることで解釈に幅を持つことが出来るようにした。

●姿が見えない近衛首相

▽ルーズベルト大統領との首脳会談に期待

一気に和平に持っていけばいいと 樂觀

▽4日午後届いたルーズベルトの回答は

「まず予備会談をして 首脳会談はその後」

▽鈴木企画院総裁は 国策要領の御前会議決定を

止めるよう進言したが 近衛は

「それは最後に決めればいい 最後の結論は
戦をやらないということに持っていくんだ」

●5日夕、末戸は御前会議議案を一読して仰天した

▽「10月上旬と期限を切っているが 期限を切る

ことはすこぶる危険だ せめてこれだけでも変更
出来ないか この案では戦争になる外ない」

▽最大の問題点を指摘 近衛は「中止変更は困難だ」

▽天皇の質問は鋭かった 「これを見ると 一に戦争

準備を記し二に外交交渉を掲げている 戦争
が主で外交が従であるかの如き印象を受ける」

▽杉山元参謀総長に対する追及は 不信任そのもの

▽天皇は「統帥部は今日のところ外交に重点をおく

趣旨と解するが その通りか」と念を押された

▽両総長も近衛も 「その通りです」と奉答

●天皇の統治権は大臣、総長の進言、輔弼によって

▽「こうせよ、そうするな」と命じることはない

▽政府と統帥部の意見一致に 天皇に拒否権はない

▽国策要領を 「外交に重点をおく」趣旨に

書き改めるべきだったのに 議案はそのままに

●日本の運命を決めた御前会議は9月6日開かれた

▽出席者は 15名

- ・政府側 近衛首相 陸、海相 外相 内相 蔵相
企画院総裁 内閣書記官長 陸海軍軍務局長
(武藤章、岡敬純)

・統帥部 両総長と次長

・枢密院議長 原嘉道

▽予め決めてある作文を 天皇の権威で承認

「昭和天皇独白録」から

「御前会議といふものは、おかしなもので
ある。枢密院議長以外の出席者は全部、す

近衛の政治手法

自分は矢面に立たずに、難問は陸海軍を嘯み合わせ、海軍に陸軍を牽制させるのが近衛のやり方だった。

南部仏印進駐を認めたのも、近衛が御前会議配布書類に「南部仏印進駐は強硬論を抑えたるものなり」と書き「多少代償的な意味で認めた」と云っているように、南進を主張する海軍を立てて、陸軍の対ソ参戦の火の粉を追い払うためだった。

アメリカの対日態度

近衛は日米首脳会談に「不惜身命」の決意で臨んだが、南部仏印に進駐してからでは時すでに遅しだった。

ハル国務長官が回想録に、「これ以後、我々の主な目的は国防準備のための時を稼ぐことにあった」と書いているように、ハルはある程度までは戦争を決意しており、日米交渉は時間稼ぎの様相を帯びてくる。

杉山 元(すげま・はじめ)

明治13(1880)～昭和20(1945)福岡県生まれ。陸軍大将、元帥。昭和12年陸相、15年参謀総長。陸相再任を経て第1総軍司令官となり、敗戦の翌月自決。重要会議の内容を記録した「杉山メモ」を残す

天皇、杉山を叱責

稔「日米に事起らば、陸軍としてはどれくらいの期間に片づける確信があるか」 紘「南洋方面だけは三か月で片づけるつもりであります」

稔「汝は支那事変勃発当時の陸相であるが、当時「事変は一か月くらいで片づく」と申したことを記憶している。然るに四か年の永きに亙って未だに片づかないではないか」 紘「支那は奥地が開けていて、予定通り作

でに閣議や連絡会議で意見一致の上出席しているのに、議案に対して反対意見を云えるのは枢密院議長ただ一人で、多勢に無勢、如何ともなし難い」

▽天皇は8月 木戸に「御前会議で納得の行くまで質問してみたい 国策の徹底的な検討の場にするよう 会議の構成を首相と相談してほしい」

▽木戸は聞き流して 手を打っていないかった

▽6日も 会議開催20分前に木戸に

「きょうはいろいろ質問したいが」と重ねて要望

▽木戸は反対 「天皇に政治責任を負わせない」

「疑問の重要な点は 原枢密院議長が質問することになっているから 陛下は最後に「国運を賭しての戦争ともなるべき重大な決定なれば 統帥部においても外交工作が成功するよう全幅の協力をせよ」との意味のご警告をされること」が最もよい」

●御前会議ではまず永野、杉山が統帥部の見解

▽永野は 玉虫色の作戦構想

日本に不利な長期戦を認め それ以後は「世界情勢がどう推移するかで決せられる」

▽「ドイツが勝ち イギリスが降伏して

アメリカが戦意を放棄する」

▽こんな 夢のような仮説が成立しないと

「日本がアメリカに勝てない」ことが行間に

▽原が 極力外交による局面打開を強調

木戸との打ち合わせ通り 政府、統帥部に質問

▽及川は「第一項の戦争準備と

第二項の外交とは 軽重がない」

▽両総長が黙っていると 突然天皇が大声で発言

天皇異例の発言

「私から事重大だから両統帥部長に質問する。先刻、原が懇々と述べたのに対し両統帥部長は一言も答弁しなかったが、遺憾に思う」

そして明治天皇の御製を書いた紙片を取り出して読み上げ「自分は常にこの御製を拝誦して、故大帝の平和愛好のご精神を受け継いでいこうと努めているものである」と付け加えられた。

「戦出来ませんでした」天皇「支那の奥地が広いというなら、太平洋はもっと広いではないか。如何なる確信があって三か月と申すか」(杉山、原、及川)

原 嘉道(はら・よしみ)

慶応3(1867)～昭和19(1944) 長野県生まれ。弁護士、法相を経て昭和6年枢密顧問官、副議長、議長を歴任

武藤 章(むとう・あきら)

明治25(1892)～昭和23(1948) 熊本県生まれ。陸軍中将。昭和14～17年軍務局長。その間近衛政権樹立を図り日独伊三国同盟、日ソ中立条約を締結、大政翼賛会を推進した。戦後A級戦犯で刑死

永野の陳述(要)

…外交交渉で帝国の自存自衛上やむにやまれぬ要求が認められず、ついに戦争が避けられないことになりましたならば、まず最善の準備をつくり、機を失せず決意し、とくに毅然たる態度で積極作戦に突き進み、死中に活を求める策に出なければならぬと存じます。

作戦の見通しは、米国が最初から長期作戦に出る公算が極めて多いと認められますので、帝国は長期作戦に必ず準備と覚悟とが必要であります。もし彼が速戦即決を企て、海軍兵力の主力をあげて速戦を求めてきましたならば、わが思う壺でございます。…これをわが予定の決戦海面で迎え撃つ場合、飛行機の活用などを加味して考えますと勝利の公算は特に多いと確信致します。ただし、この決戦で帝国が勝利を得た場合でも、それでこの戦争を終わらせることはできそうになく、恐らく米国は、本土が難攻不落であり、工業力と物資力が群を抜いていることを活用し

▽両総長が「原議長の趣旨と同じ考えであります」

▽この御製のエピソードほど 天皇の

「何としても戦争を避けたい」と云う気持ちを痛切に表わしたものはない

▽拒否権を持たず 木戸から質問も封ぜられ

憲法上なし得る 精一杯のお心の表明だった

●天皇の発言は、一時的に陸軍に大きな衝撃

▽東条は「聖慮は平和にあらせられるゾ」と叫んだ

▽武藤も「戦争などとんでもない 俺が今から読んできかせる(瀬原を説く)これは何でもかでも外交で妥結せよとの仰せだ 外交をやらにゃいかん」

…… 武藤は声をひそめて付け加えた ……………

「どうせ戦争だ。だが大臣や総長が天子様に押しつけて戦争に持っていったのはいけない。天子様がご自分から、お心の底から、やむを得ぬとお諦めになって戦争のご決心をされるよう、ご納得のいくまで手を打たねばならぬ。だから外交を一生懸命やって、これでもいけないというところまで持って行かないといけない。大臣にもこの旨云うとく」

●「外交第一」が確認されただけで「国策」は承認された

▽「開戦決意」は軍部の「錦の御旗」に

▽近衛はなぜ「天皇発言」にすぐ反応しなかったのか

その場で「政府の責任において

議案を練り直すため きょうはこれを取り下げる」と 発言しなかったのか

▽戦争準備態勢を 一度ご破算にさせる

最初で 最後のチャンスだった

●近衛は、東久邇宮陸軍大将に東条説得を依頼

▽宮様に 中国撤兵の地ならし

▽東条は「撤兵は絶対に認めることは出来ない」

一晩で 陸軍の強硬論を代表する顔に

●グルー大使を密かに招き首脳会談早期開催を要請

▽「大統領と同意し次第 天皇は直ちに 一切の敵意ある行動の停止を命ずる詔勅を出されるだろう」

長期戦に移ってくると予想されます。

帝国は、進攻作戦によって敵を屈伏させ、戦意を放棄させる手段を持たず、かつ国内資源に乏しいので、長期戦をとるのははなはだ好ましくないところではあります。長期戦に入った場合、開戦当初速やかに敵軍事上の要所と資源地を占領、作戦上堅固な態勢を整え、その勢力圏内から必要資材を獲得することにより堪えうることをできると存じます。…それ以後は、有形無形の各種要素を含む国家総力がどうなるか、世界情勢がどう推移するかによって決せられるところが大きいです。…

平和的に現在の難局を打開し帝国の発展安固を得る道は、あくまで努力して求めなければなりません。同時にまた、大阪冬の陣のような平和を得て、翌年の夏には手も足も出ぬような不利の情勢で再び戦わねばならぬような事態はになりますことは、皇国百年の大計のためにとってならぬと存じます。

東久邇 稔彦(ひしひく・なるひこ)

明治20(1887)～平成2(1990) 京都生まれ。陸大卒後フランス留学。昭和14年陸軍大将。16年防衛総司令官。20年8月、初の皇族内閣を組織、戦後処理に当たる。22年皇族籍を離脱

…… 東久邇宮と東条のやりとり ……………

「軍には「命令に従う」という言葉がある。いま天皇と総理が日米会談を成功させたいと云うのだから、陸相としてはそれに従うべきだ」と説得しても、東条は「見解の相違である」。最後は「日本がジリ貧になるより、思い切って戦争をやれば勝利の公算は二分の一であるが、このまま滅亡するよりはよいと思う」と言い捨てて帰っていった。

▽「終戦の詔勅」のような 非常手段をにおわせ
近衛は「時間の問題が大切だ

我々は時間に追われている」と繰り返した

▽グルーは「首脳会談が実現すれば 危機的状況を
回避出来る 日本は譲歩する」と繰り返し打電

▽ルーズベルトとは ハーバード大学在学中
一緒に大学新聞を編集した仲

9月22日 大統領に直接手紙で訴えた

▽29日には ハル国務長官に意見電報

「この際 原則論を棚上げにすべきだ 日本は
十分に譲歩の意思表示をしている 首脳会談
が実現しなければ 軍部内閣が出現する」

●「アメリカ国務省にもう一人グルーがいたら…」

▽グルーの努力を阻む 巨大な壁

▽日本には 「アメリカに弱みを見せるな」の
松岡洋右がいて 日米交渉を引っ掻き回した

▽アメリカにも 妥協を嫌い 対日強硬論の
極東担当顧問ホーンベック(昭和3~12年 国務館顧問)
中国の大学で4年教鞭 心情的にも中国に好意

▽この時期 似たような性格の二人が
日米の外交責任者だったこと
共に黙って引っ込むことを嫌う「誇り高い国」

●「中国撤兵」問題が日米交渉最大の争点に

▽アメリカは いつでも対独戦参入の姿勢

「米国の定めた防御海域に入ってきた
独艦艇・航空機は攻撃 撃退せよ」と命令

▽三国同盟問題は それほど問題ではなく
ハルも 野村吉三郎大使に

「中国問題を離れて 日米国交調整は困難」

▽アメリカには 外務省案(9月3日 閣議承認)

「支那よりは 出来得る限り速やかに
撤兵する用意あり」が 提案されていた

▽陸軍はこれに不満 9月20日の連絡会議で
「一定地域における軍隊及び艦船の

所要期間駐屯」を提案 引っ繰り返した

▽外交暗号解読で米に筒抜け 不信感募らす

▽統帥部 交渉期限を「10月15日」に申し入れ

▽近衛は木戸に辞意 鎌倉山別邸に引き籠もる

グルー (Joseph Clark Grew)

1880~1965 国務次官、トルコ大使を経て昭和7年駐日大使。17年まで駐在し満州事変後の日米関係改善に努力。帰国後、国務次官、国務長官代理となり日米親善に尽力した。著に「滞日十年」

グルーの大統領宛て書簡

「…日本はこれまで何度も約束を破
ってきました。しかし現在の政府は、
国際的な誓約を遵守しようとしてい
ると、私は信じます。

近衛公が政権の座についている機
会を掴まなければ、日米友好を達成
するより良い機会が訪れるとは思え
ません。すでに国際関係や経済に無
知な過激主義者たちは近衛公を脅か
しています。いま了解点に達するこ
とが出来なければ、戦争の危機は著
しく増大します…

ある程度は日本を信用してかから
ねばならないかも知れませんが、こ
の際には日本と平和的合意に達すべ
きだと、私は心から願うのです。

松岡 洋右(まつおか・ようすけ)

明治13(1880)~昭和21(1946)山口県生
まれ。13歳で渡米、オレゴン法科大卒業
外交官。昭和8年国際連盟日本代表とし
て満州国否認に抗議し退場。満鉄総裁
を経て15年近衛内閣外相。三国同盟、日
ソ中立条約締結。対米強硬姿勢を唱え
て更迭される。戦犯に指名され病死

野村 吉三郎(のむら・きちさぶろう)

明治10(1877)~昭和39(1964)和歌山県
生まれ。海軍大将。学習院長を経て昭和
14年阿部内閣外相。15年11月駐米大使。
戦後29年に参議院議員

- 10月2日、事実上最後通告の「ハル回答」
 - ▽首脳会談は「予め政府間にしっかりした了解が成立しない限り 開催は不可能」
 - ▽「ハル四原則」の無条件確認を求めた上で「異議の余地あり」と 明確に否定したのが「不確定期間 支那特定地域に軍隊の駐屯」中国、仏印から 日本軍全面撤退を求めたもの
 - ▽日本が 要求を全面的に呑まない限り「ハル・ノート」(11月26日)を待つまでもなく日米交渉は この時点で終わっていた

- ゾルゲは「政変、開戦」情報をモスクワに打電
 - ▽8年間400件の情報は これが最後になった10月18日 東条内閣発足の日に逮捕
 - ▽きっかけは 共産党員伊藤律の供述「元米国共産党員北林トモが帰国し和歌山県に」
 - ▽アメリカから送られてくる反戦文書を内偵中の警視庁が ゾルゲ機関を一斉摘発

- 海軍が「戦争に自信を持っていない」事実が表面化
 - ▽「ハル回答」を どう判断するか？
 - 近衛 外務省 海軍は「撤兵問題で譲歩すれば交渉成立の余地あり」 陸軍は「なし」と対立
 - ▽陸軍首脳会議は 5日
 - 「速やかに開戦決意の御前会議を要請すべし」
 - 東条陸相が同夜 近衛に申し入れた
 - ▽海軍首脳会議 「原則的に全面撤兵の方針を示し外交によって解決すべきだ」
 - ▽海軍作戦部長・福留繁(ふくとむ・しげる=のち中将)が6日の陸海軍局部長会議で 陸軍に衝撃

福留発言

「南方作戦ニ自信ナシ。船舶ノ損耗ニツキ戦争第一年度八百四十万ト、撃沈サレ、連合艦隊ノ新タナ図上演習ノ結果、戦争第三年ニハ民需用船舶皆無トナル。自信ナシ」

- ▽蘭印を占領して 油田地帯を確保しても船がなければ 日本に持ってくる手段がない
- ▽日本の根本的な敗因の一つに 船舶喪失 激減 長期不敗態勢は 船舶被害から崩れる

ハル四原則

- ①領土保全と主権の尊重②内政不干渉③機会均等④太平洋の現状維持

ゾルゲ(Richard Sorge)

1895~1944 ドイツの共産主義者。昭和8年新聞特派員として来日。オット独大使の絶大な信頼を得て、近衛首相の朝飯会常連の元朝日記者尾崎秀実などから情報収集した。19年11月7日死刑

…… ゾルゲは10月4日打電した ……

「日本官辺筋ノ諸情報ニヨレバ、今月ノ十五日カ十六日マデニ、アメリカガ日本ニ対シテ満足スベキ回答ヲ寄越サナイ場合ハ、内閣ノ総辞職カ大幅ナ改造ガ行ナワレルデアロウ。イズレニセヨ今月カ来月ノウチニ対米開戦ガ予想サレル。…」

ソ連ニツイテハ、日本ノ首脳ハ、…イマノトコロハソ連ト戦ウ必要ガナイトイウ意見デアル。ドイツガモシ、ソ連政府ヲ壊滅サセ、モスクワカラ追イ落トスコトガデキナイ場合ハ、日本ハ来春マデ静観スベシトイウノガ彼ラノ考エデアル。イズレニセヨ、北方問題ヨリモ対米問題、ソシテ南方進出ノ方ガハルカニ重要デアル」

伊藤 律(いとう・りつ)

大正2(1913)~平成1(1989)岐阜県生まれ。一高在学中に共産党入党し昭和8年検挙。15年6月再検挙されゾルゲ事件発覚に関わる。20年出獄し党政治局員。25年地下活動に入り、26年中国へ密出獄。28年スパイとして党除名。55年帰国

日本の船舶被害

戦争第1年度こそ130万トですんだが、2年度179万ト、3年度378万トと激

●山本五十六連合艦隊長官も「戦争回避」を訴えていたが、永野の「対米戦決意」は変わらなかった

▽6日夕 再開された海軍首脳会議は

「撤兵問題のため日米戦うは 愚の骨頂」

▽及川が 途中から出席した永野に

「それでは 陸軍と喧嘩する気で

争うてもようございますか」と確認すると

永野は「それはどうかね」と プレーキ

..... 沢本海軍次官の話

「あの時永野が阻止しなかったら、恐らく海軍大臣辞職と内閣崩壊、陸海軍対立の激化、戦争中止などの事態が起こったかも知れない」

▽戦争になれば 陸海軍は協同作戦

「いざこざは避けたい 事を荒立てず穏便に」

●「福留発言」は東条にもショック

▽陸軍も 海軍に自信がなければ戦えない

▽東条は 杉山と会談

「福留発言が真実なら 輔弼責任をとり辞職」

▽陸軍の方針としては 駐兵問題は

「その表現方法を含め 一切変更を認めない」

▽7日 永野は杉山に 福留の悲観論を一蹴

▽東条に心の動揺 及川に心情を打ち明けている

「支那事変にて二十万の英霊を失い このまま放棄するには忍びず ただし日米戦とならば さらに幾多の人命を失うことを思えば 決しかねたるところなり」 暗に海軍の態度表明を

●しかし東条は「撤兵拒否」を強硬に主張した

▽近衛は9日 「撤兵を原則とし運用で駐兵の実」

妥協を求めたが 東条は拒否

「15日に和戦の決定を」と ダメを押した

..... 木戸は「臥薪嘗胆」を勧めた

木戸は9日、近衛に「御前会議決定を再検討して開戦を回避し、十年ないし十五年の臥薪嘗胆を国民に闡明して、高度国防国家の樹立、国力の培養に専念することにしたらどうだ」と勧めたが、近衛は「政界を引退して僧侶になりたい」

増、戦争中の船舶沈没は2,259隻、814万6千ト、使用不能2,534隻、890万2千トにのぼった。

南方の石油は1,731万ト採掘したものの、内地へ輸送出来たのは17年150万ト、18年275万ト、19年から133万トと下がり始め、20年はついにゼロ。連合艦隊は現地に行って直接油を補給する有様だった。

山本 五十六(やまもと・いそく)

明治17(1884)～昭和18(1943)新潟県生まれ。海軍大将。昭和12年海軍次官となり、米内海相を助けて三国同盟に反対。14年8月連合艦隊司令長官。開戦劈頭の真珠湾攻撃を立案、実行した。前線を視察中ソロモン上空で戦死。死後元帥

..... 山本は永野に訴えた

9月29日、永野に「連合艦隊長官ではなく一人の大将として第三者の立場から云えば、戦争は長期戦となり、艦船兵器が補充困難となるばかりでなく、国民生活も窮乏し、内地はともかく満州、朝鮮、台湾に反乱が起こる恐れがある。このような成算の少ない戦争をしてはならない」と強調した。

— 中国撤兵はほとんど不可能に —

「暴支膺懲」「聖戦」を叫んできた陸軍は、戦死18万4千、戦傷32万を出し、急に対米協調のため撤兵すると云っても、軍だけではなく、国民全体が納まらない雰囲気が出来ていた。

「支那事変の成果」を示す面子のためにも、「特定地域に一定期間軍隊駐屯」は絶対に譲れぬ線になっていた。

しかし太平洋戦争では、戦死が陸軍114万、海軍41万、民間人死亡30万。行方不明、戦傷者を入れると253万の莫大な犠牲を出す。(経済安定本部23年5月現在調査)

●近衛に残された道は、御前会議決定を白紙に戻して交渉継続を可能にすること

▽海軍に「戦えない」と 陸軍にぶつけてもらう

▽海軍は 「近衛に下駄を預けられる」と警戒

そこへ 「陸軍が 海軍に頭を下げさせ

ようとしているのだ」と云う情報

▽「莫大な予算をとってきた海軍が アメリカと戦えないと云えば 何のための予算だったと云うことになる」「陸軍は予算や軍用資材の獲得で海軍の優位に立とうとしているのだ」

●近衛は12日、荻外荘で「五相会談」

▽前夜遅く 富田健治内閣書記官長に言い含めて及川を訪ねさせ 海軍の協力を求めた

▽及川にも かつて米内光政が海相時代

「日本の海軍は 米英を相手にして戦うようには 建造されていない」と云ったように

「対米英戦争は出来ない」と云ってほしかった

▽及川は「総理一任」 近衛に下駄を預けてしまった

▽及川は国务大臣であり その立場は政治家

▽憲法第55条で 天皇を直接輔弼すべき絶対的責任

それは 首相を介して輔弼するものではない

▽戦争が可能かどうか 戦争をすべきかどうか

その判断をするのは まさに軍部大臣の使命

▽こうした逃げ腰が 亡国への道を辿る根本原因

▽武藤陸軍軍務局長は 富田に

「総理の裁断というだけでは 陸軍部内の主戦論を抑えることは出来ない もし海軍が戦争をするのが嫌なら はっきりそれを海軍の口から云ってもらいたい そうしたら 部内の主戦論を抑えられる」

▽五相会談で 近衛、豊田貞次郎外相と東条が対立

▽及川は 「和戦の決は 総理の裁決に待つ」と

戦争回避の責任を背負わずに 逃げた

▽東条は 統帥権を持ち出した

「御前会議決定に従い 兵を動かしつつある

統帥は国务の外に 独立しており

陸軍は 総理に盲従出来ない」

▽陸軍は9月18日 作戦準備命令

南方作戦に 南支那 台湾 北部仏印に移動中

富田 健治(とみた・けんじ)

明治30(1897)～昭和52(1977)兵庫県生まれ。長野県知事を経て昭和15年近衛内閣書記官長。27年衆議院議員

米内 光政(よない・みつまさ)

明治13(1880)～昭和23(1948)岩手県生まれ。海軍大将。昭和12年海相。15年1月首相となり三国同盟に一貫して反対、陸軍の協力が得られず7月総辞職。19年再び海相となり、戦争終結に尽力

及川の「総理一任」

「あなたの云われることはよくわかります。しかし軍として戦争出来る、出来ない、など云うことは出来ない。戦争をする、せぬは政治家、政府の決定することです。戦争をすると決定されたなら、いかに不利でも戦うと云うのが軍の建前だと思います。そこであるの会談では、海軍大臣としては、外交交渉を継続するかどうかを、総理に委すと云うことを表明しますから、それで近衛公は交渉継続と云うことに裁断してもらいたい」

憲	第55条	国务各大臣ハ天皇ヲ
		輔弼シ其ノ責メニ任ス
法	第11条	天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス

及川発言に

五相会談に出た鈴木貞一「海軍大臣が戦が出来ないと云えば、東条でもやっぱり戦争を止めているでしょう」

山本五十六「オレが当局者だったら、海軍は正直に「アメリカに対し、最後の勝利はない」と云うね」

井上成美(のち輝煌、煇)「もし私が大臣だったら、はっきり云う。及川は人格者ではあったが、自分の意見を云わない人だった。大臣の器ではなかった」

▽しかし 統帥権を持ち出すなら

天皇の「平和」の意思に 従わなければ…

▽近衛が「戦争には自信がない 戦争と外交の

二者択一なら 戦争をとる」と云うと

東条は「これは意外だ 戦争に自信がないとは

何ですか それは御前会議で発言されるべき

ことだ 今更責任がとれぬとは云わせない」

●14日の閣議も正面衝突、及川は沈黙したまま

▽閣議前 説得する近衛に

東条は「人間 たまには清水の舞台から

目をつぶって 飛び降りることも必要だ」

「悲観的過ぎる これは性格の相違ですなあ」

▽東条は参謀本部に「陸軍は引導を渡したつもりだ」

●近衛に総辞職を勧告した

▽鈴木を通じ 「海軍が戦争の肚が決まらないなら

御前会議決定は根本的に覆る 御前会議に出

席した首相はじめ 陸海相 統帥部の両総長

も 輔弼の責任を果たさなかったことになり

この際全員辞職して 今までのことをご破算

にし もう一度 案を練り直す以外にない」

●東条が後継首相に推したのは、「日米不戦論」で東条

とは対立する東久邇宮だった

▽近衛も 「自分が副総理になってお助けしたい」と

15日 参内して内意を伺った

▽天皇は 「自分はどこまでも平和で行きたいと思

う 皇族が出ると云うことは 自分の名代の

ようなものだから 皇族が出たら 平和の方

に決めてもらわなくてはならぬ」

▽木戸は 「陸海軍の政策転換同意」が前提

鈴木に 東条の真意を尋ねさせると

東条は 「殿下の出馬により不戦と決定になり

陸軍を抑えなければ 誰が出たら抑えられ

るのか」 こう言い切りながら

「ただし自分は 今抑え得るとも得ないとも

言明出来ない」

▽木戸は 「これは危険だ」と思った

「天皇の意のあるところは あくまで臣下で」

東条は強硬に「撤兵反対」

「撤兵を看板にして駐兵の実をあげると云うが、撤兵は退却であり、軍は士気を失う。士気を失った軍隊はないのと同じです。駐兵は心臓である。米国の主張にそのまま屈したなら、支那事変の成果は壊滅に帰する。ひいては満州国の存立を危うくし、さらに朝鮮統治も動揺する」

東条の東久邇内閣構想

東条は、本当は海軍に戦争を拒否してほしかったのではないだろうか。そうすれば海軍を理由に御前会議決定を見直せるが、海軍が云わない以上、「陸海軍を抑えて案を練り直す力のある者は、宮様しかいない」と云うのだ。

陸軍部内には「天皇から撤兵命令が出ても最後まで頑張る」と、主戦論が燃えたぎっていた。もし、見直しの結果、全面撤兵といった対米大幅譲歩になれば「支那事変の敗北」を認めることになる。陸軍の名誉にかけても出来ないし、東条が陸軍部内に築いてきた威信も失墜する。それは自分には出来ないが、天皇の権威につながる皇族なら出来るのではないか。それも日米不戦を唱えてきた東久邇宮の号令なら、陸海軍や国内の反対、動揺を抑えられると、東条は判断したのではないだろうか。

「木戸日記」から

「万一皇族内閣にて日米戦に突入するが如き場合には之は重大にて…皇室は国民の怨府となるの虞あり」

●近衛は16日、木戸から「東久邇内閣反対」を伝えられ、内閣総辞職

▽東条は木戸に「然らば日本は一体どうなるのだ」

▽木戸は後継内閣を その東条に考えていた

▽近衛も「陸軍の統制が先決」と 東条に賛成

●17日の重臣会議に、木戸は「功罪共に一身に引き受ける覚悟」で臨んだ

▽宇垣一成元陸相や 宮様案も出たが

木戸は 内大臣は発言しない慣例を破って

「結論から云えば」と 東条を推薦

▽若槻礼次郎元首相は 懸念を指摘

「東条と云うことになれば 外に対する印象は悪いと思う 外国に与える影響もよほど悪いと思わねばならん」

▽会議の最後を決定づけたのは 木戸の保証

「東条となら自分は話がつく 東条は日米交渉の出来る人だ 天皇のお言葉があれば 米国と戦争をするようなことは しないだろう」

▽戦局が悪化した時 重臣の非難を浴びたが

木戸は 敗戦後30年経ってからでも

「東条推薦が失敗だったと云うのは 結果論だ どう考えてみても 僕にはあれしかなかった」

●東条にも予想外の大命降下だった

▽陸相官邸から引越しの最中 お召しの電話に

「陸軍の駐兵固守」に対する お叱りと覚悟

▽武藤の指示で「駐兵必要」の上奏文を作成

東条は「天子様がこうだと云われるならば それまでである ハイと云って引き下がります 天子様に理屈を述べるでない」と はねつけ参内

▽天皇は「憲法遵守 陸海軍の協力」さらに

「時局は極めて重大な事態に直面せると思う」

▽御前を下がってきた東条に

木戸は 天皇の意思を伝達した

「白紙還元の御詔」

「九月六日の御前会議決定に囚わるることなく 内外の情勢をさらに広く深く検討し、慎重なる考究を加うることを要すとの思召であります」

木戸の東条内閣構想

木戸は東条の変化を感じ取っていた。内大臣秘書官長の松平康昌に「東条はこの数日の間に考えを変えたように思われる。海軍が開戦に反対なら、東条は開戦を唱えることはない」(東久邇)と語っていた。

東条を買っていただいた。「陛下のおっしゃることなら、一番真正直に服従していた。杉山なんて云うのはずいぶないオヤジでどうにもならないが、そこへゆくと東条はいい。ダメならダメとはっきりしているから」。

昭和44年、東北大教授池田清に「今回組閣する者は、陛下の思し召しを真に奉戴して、まず軍部、ことに陸軍を十分に統率出来、また陸海軍を完全に協調させ得る強力な人物でなければならぬ。だが、私の知っている海軍の長老や首脳部はいずれも紳士的過ぎて、野性的な陸軍を抑えるには非力だった。陸軍を抑えるには、この際むしろ陛下の思し召しに忠実な東条の方が適任と判断したのだ」。

宇垣 一成(うがき・かぢげ)

慶応4(1868)～昭和31(1956) 岡山県生まれ。陸軍大将。陸相時代「宇垣軍縮」を断行し宇垣時代を築く。二・二六事件後組閣の大命を受けたが陸軍の反対で断念。第1次近衛内閣外相。戦後参院議員

若槻 礼次郎(わかき・れいじろう)

慶応2(1866)～昭和24(1949) 島根県生まれ。蔵相、内相を経て大正15年首相となったが、金融恐慌で辞職。民政党総裁となり昭和6年再び首相。しかし満州事変勃発で内閣は8か月で崩壊した

- 木戸はなぜ、「天皇の希望は御前会議決定の廃棄、対米不戦にある」と、はっきり伝えなかったのか
- ▽東条は「天皇に無条件服従」の心境だった
- ▽東条内閣は「和戦両睨みの内閣」

「この際 和か戦か測られず いずれにも応ぜられる国内体制が必要と考えた」(東條内閣資料)

- ▽あいまいな表現で伝えた「白紙還元」は形式上 手続き上の「白紙還元」に終わる運命
- 東条内閣は「避戦内閣」であっても「不戦内閣」ではなく 国策の検討次第で「開戦内閣」になる宿命を 持っていた
- ▽木戸自身 「和戦両様」の中途半端な考え
- 戦争を避けられるなら 東条で陸軍の統制
- 戦争の場合には 宮様や文官より東条がいい

- 木戸の最大のミスは、「白紙還元」を参謀総長、軍令部総長に伝えなかったこと

- ▽御諚を受けていない統帥部は 何ら拘束を受けず「国策再検討なんかしている余裕はない」と反発を強め 着々と戦争準備を進めた
- ▽機密戦争日誌は「ついにサイは投ぜられたるか」
- ▽高松宮も日記に「これで国交調整もだめ とうとう開戦と決まった気持ち」
- ▽読売新聞は「新しい内閣が日本に活力を吹き込み 国民を決起させ 反枢軸勢力に大打撃を与える」
- ▽国民の多くは 直観的に「開戦内閣」
- ▽アメリカも 「日本の戦争決意」ととった
- 米陸海軍省は17日 ホノルルの司令官に「日本は ソ連、米英を攻撃する公算がある」警告を出し 商船隊にも退避命令

- 18日発足した東条内閣は、陸軍から「東条変節」の声が出るほど、御諚に忠実に副おうとするもの

- ▽武藤がいつものように 陸軍の希望する閣僚名簿
- 東条は「干渉してくれるな」と 不機嫌になり「本日からは 陸軍だけの代表ではないから 公正妥当な人選を しなければならぬ」
- ▽外相には 平和主義者の東郷茂徳を起用
- 駐独大使の時 三国同盟に反対して
- 在任10か月で ソ連大使に移された

統帥部は反発した

機密戦争日誌は「如何なることありと雖も新内閣は開戦内閣ならざるべからず。開戦、開戦これ以上に陸軍の進むべき道なし」と書いていた。永野も杉山に「内閣更迭後といえども、決心に変化なし」と語っている。

参謀本部が開戦期日を11月初めとしていたのは、12月を過ぎるとマレー半島の季節風が強まり、上陸作戦が困難になるからだった。だから、政変により開戦期日が遅れることになっても、12月初めを絶対に逃してはならないとの判断を固めていた。

……もし東久邇内閣だったら？ ……………

鈴木貞一は「もし東久邇さんが首相になり、陸相に東条のような上に対しては絶対に服従する人を置いたら、戦にならなかったと思う。陸相がしっかりしておって、総理と一体になって動くと言うことであれば、軍はそれに従って動く」と云っている。

東条には、もともと好きでない東久邇の下で損な役回りを引き受ける気持ちはなかったろうし、強硬な統帥部が素直に従ったかどうか。

ハル回想録から

「近衛内閣から大したことは期待していなかったが、東条内閣になってますます期待が持てなくなった」

東郷 茂徳(とうこう・しげのり)

明治15(1882)～昭和25(1950)鹿児島県生まれ。駐独・駐ソ大使を経て昭和16年10月東条内閣外相。翌年大東亜省設置に反対して辞任。20年鈴木内閣外相。A級戦犯として禁固20年、拘禁中に病死

▽松岡外相から 辞表を求められると

「罷免されない限り 辞めない」と抵抗

▽東郷はまず 駐兵問題を質した

東条は「強硬意見の自分に大命 だから
どこまでも強硬態度を持していいはずだ」

▽「それでは交渉決裂は明瞭だ」と 拒絶すると

東条は慌てて「自分の気持ちを述べただけ」

▽東郷が「その気持ちを持っているだけでもダメ

相当に譲歩するとの覚悟があり 交渉成立に
真に協力するのでなければ 入閣出来ない」

▽東条から「交渉成立に全力」の言質をとり承諾

●蔵相の賀屋興宣も入閣に注文

▽満州事変 支那事変の 軍部独走を挙げると

東条は「内閣の意思に反して 陸軍が戦争を
始めるようなことは 絶対にさせない」

▽「平和維持の見込みがあるかも知れない」と受諾

●もめたのが海相人事

▽及川は最初「陸軍嫌い」の豊田副武を予定

「陸軍に云いたいことを云えるのは 豊田」

▽ところが東条は「豊田は困る」と拒否

「協調精神がなく 固執するなら総理固辞」

▽沢本次官らは「悪例を残す」と反対

「東条じゃ どうせ戦争になる 潰した方が
国のためだ」と 豊田で行くことを勧めたが
ここでも 及川はひるんだ

▽海軍の反対で 組閣が流れることを気にして

山本と海兵同期の 嶋田繁太郎を後任に

▽山本が「嶋はんは おめでたいから」

イエスマン「東条の副官」と悪評

●東条は中將の任期がまだ残っていたが、特例で大將に昇進、陸相兼務のため現役のまま首相に就任

▽18日の初閣議の後 各省、統帥部に

11項目の検討項目を示し 再検討を要請

▽連絡会議は 23日から連続会議

国策の再検討に入ったが…

▽機密戦争日誌は「統帥部トシテハ再検討ノ

余地ナキモ 一応再検討スルコトトス」

賀屋 興宣(かや・けいり)

明治22(1889)～昭和52(1977)広島県生まれ。大蔵次官を経て昭和12年第1次近衛内閣蔵相。16年東条内閣蔵相となり、戦後A級戦犯で終身禁固。30年に出所。33年衆議院議員に当選、池田内閣法相

嶋田 繁太郎(しま・しげろう)

明治16(1883)～昭和51(1976)東京生まれ。海軍大將。軍令部次長、横須賀鎮守府長官を経て昭和16年10月東条内閣海相。19年軍令部総長を兼任し、東条に追従したため部内の反発を受ける。19年7月辞任。A級戦犯で終身禁固。30年釈放

豊田 副武(とよだ・そむ)

明治18(1885)～昭和32(1957)大分県生まれ。海軍大將。呉鎮守府長官を経て昭和19年5月連合艦隊司令長官。20年軍令部総長。著に「最後の帝国海軍」

…… 陸相、内相まで兼任 ……

現役大將のまま首相になった例は、明治・大正時代に山県有朋、桂太郎、寺内正毅があるが、陸相兼任は東条が初めて。

しかも内相を兼任したので、「権力欲の固まりだ」と陰口されたが、秘書官の赤松貞雄大佐に「二・二六事件以上のことが起こるかも知れない。そうした場合、憲兵と警察を一手に握り、断乎涙を吞んでこれを鎮圧し、微動だにさせない必要があった。そのため陸相と内相を兼任したのだ」と語っている。

— 天皇も東条を気に入っておられた

東条は一に公務、二に公務、三、四がなく五が公務、と云われたくらい、とにかく真面目一筋。何でも逐一上奏し、中

▽担当部局が同じなのだから 1か月かそこらで
出してくるデータが そう変わるはずもない

▽連絡会議で これを取り上げる新顔は

東郷外相 賀屋歳相 嶋田海相の3人だけ

軍部側は 総長 次長 作戦部長

次官 軍務局長と 近衛内閣時代と全く同じ

▽どうしても心理的に 惰性に支配され

軍部の開戦論が 強くなっていった

▽東条は「忠良なる軍人」であり

「メモ魔」と云われるくらい 能吏型の官僚だが

視野の広い 国際的判断力を持つ人でなかった

▽再検討の行き着く先は 結局

交渉期限を「12月1日」に延ばしただけ

●近衛は20年12月16日、青酸カリ自殺した

▽若い時から 現状打破の志を抱いていたが

政府と軍部の 二重構造に翻弄され

日本の進路を もてあそんだ形になった

▽開戦か和平かの 重大な時期に特徴的なことは

両論併記 玉虫色の字句修正 問題先送り

責任逃れ 面子のこだわり セクト主義

リーダーシップ不在

間報告、結果報告を励行したから、天皇も「東条は一生懸命やっている」と喜ばれていた。

木戸は日記(10月20日)に「今回の内閣更迭は真に一步誤れば不用意に戦争に突入することとなる虞あり。熟慮の結果、之が唯一の打開策と信じたるが故に奏請したる旨を詳細言上す。極めて宜く御諒解あり。所謂虎穴に入らずんば虎児を得ずと云ふことだねと仰せあり、感激す」と書いている。

…… 近衛の遺書 ……………

「僕の志は知る人ぞ知る。…戦争に伴う興奮と、激情と、勝てる者の行き過ぎた増長と、敗れた者の過度の卑屈と、故意の中傷と誤解に基づく流言蜚語と、是等一切の輿論なるものも、いつかは冷静を取り戻し、正常に復する時も来よう。其時初めて、神の法廷に於て正義の判決が下されよう」